

沿革

- 1970年 資料館建設積立基金を設定、事務局を社会教育課に置く。
- 1971年 町田市郷土資料館（仮称）建設審議会を設置、敷地を町田市本町田3562番地の1に決定。
設計をRIA建築総合研究所（代表 山口文象氏）に決定。
- 1972年 町田市郷土資料館準備室を設置。建設工事を清水建設と契約。
- 1973年 町田市郷土資料館条例制定公布。
町田市郷土資料館竣工。
館長 水澤澄夫就任。
開館式（11月3日）一般公開。
- 1975年 館長 諏訪元一就任。
- 1976年 館長 千沢楨治就任。
町田市立博物館と改称、同時に博物館法による登録博物館の申請を行い受理された。
大津絵収集開始。
- 1977年 「春季特別」展にて、12,039名の観覧者を記録。
- 1978年 「紙でつくる」展（当館開催1977年10月）、北欧3カ国他を巡回。
- 1983年 ガラス工芸品収集開始。
- 1986年 「町田の縄文」展にて、12,148名の観覧者を記録。
- 1987年 館長 田邊三郎助就任。
岩崎安吉氏より、印判手磁器1,387点を受贈、陶磁器収集開始。
田河水泡（高見澤仲太郎）氏より、戯画・風刺画550点を受贈、関連資料収集開始。
「出土品に見る町田の昔」展にて、11,768名の観覧者を記録。
- 1988年 「ボヘミアン・グラス 同時開催 中国乾隆ガラス」展にて、15,284名の観覧者を記録。
- 1990年 山田義雄氏より、東南アジア陶磁器567点を受贈。
- 1992年 山田映里氏より、東洋陶磁器675点を受贈。
故米原徹夫氏のご遺族より、時計108点を受贈。
- 1994年 中村三四郎氏より、東南アジア陶磁器626点を受贈。
- 1997年 「町田市立博物館蔵 ヨーロッパのガラス」展にて、11,877名の観覧者を記録。
- 2001年 街かどギャラリーにて「チェコガラス」展、「町田市立博物館の皿30」展開催。
- 2002年 旧岩田工芸硝子株式会社より、岩田藤七・久利・糸子のガラス作品105点を受贈。
- 2008年 教育委員会から文化スポーツ振興部に移管。
木内知美氏より、東南アジア陶磁器265点を受贈。
- 2012年 「蓮ーLotus Landー」展より入館料徴収開始。
- 2013年 上神亮治氏より、中国・東南アジア陶磁器132点を受贈。
- 2014年 （仮称）町田市立国際工芸美術館整備基本計画策定、公示。
- 2016年 （仮称）町田市立国際工芸美術館整備基本設計策定。
青野覚氏より、青野武市のガラス作品87点を受贈。
- 2017年 須田好一氏より、須田富雄の江戸切子作品30点を受贈。
大平洋一氏より、ガラス関連資料89点受贈。
- 2018年 三輪の森ビジターセンター内に郷土資料展示室開室。
- 2019年 館長 伊藤嘉章就任。
「町田市立博物館最終展 一工芸美術の名品一」にて、11,143名の観覧者を記録。
愛知県陶磁美術館にて「黄金の地と南の海から 一町田市立博物館所蔵 東南アジア陶磁コレクション」展開催。
博物館内での展示事業終了。

郷土資料館、博物館、そして工芸美術館へ

2019（令和元）年6月16日、『町田市立博物館最終展—工芸美術の名品—』は11,143人という歴代7番目の入館者を迎えて終了した。これをもって町田市立博物館が1973（昭和48）年以来続けてきた展示活動は一区切りを迎え、アウトリーチ活動を行いながら、新たな時代に向けて準備を進めている。ここで、郷土資料館に始まり、博物館を経て、工芸美術館へと生まれ変わろうという館の沿革と現状、そして未来を見ていきたい。

○郷土資料館の時代

1958（昭和33）年町田町、鶴川村、忠生村、堺村が合併し、61,105人の人口を擁する町田市が誕生した。1960年代中頃から町田市では鶴川、木曾、山崎、藤の台などの団地造形に伴い大規模な発掘調査が始まった。そのための出土品が急増する一方、急速な都市化で、これまで伝えられてきた古文書や民俗資料に消失の危機が迫りつつあった。

1960年代は、1965（昭和40）年の東村山市立郷土館、1967（昭和42）年の八王子市郷土資料館と、三多摩地域に郷土資料館設立が始まっていた。町田市でも文化財の保存や、学校教育、社会教育の充実のために郷土資料館建設の声が上がるようになっていった。

町田市の人口が20万人を越えた1970（昭和45）年には、資料館建設のための基金積立が設定され、民俗資料などの収集も始まった。翌年、町田市郷土資料館（仮称）建設審議会が設置され、建設が始まっていた本町田遺跡公園の隣接地が設置場所に定められた。

1973（昭和48）年、RIA建築総合研究所（代表山口文象）の設計による建物が完成し、町田市郷土資料館として開館した。初代館長には柳田民俗学を学び、日本美術・エジプト美術の学究であった水澤澄夫（1905～75）が就任し、開館記念展「遺跡と生業（養蚕）」を開催、以後「大工道具展」「凧展」などを開催している。

○町田市立博物館へ

1975（昭和50）年には文化部長諏訪元一が館長となり、翌年から東京国立博物館の学芸部長であった千沢禎治（1912～84）が第3代館長に就任している。絵画・彫刻の学究であった千沢の館長就任の年、町田市立博物館と改称し、登録博物館となった。この年には後に東日本で最大のコレクションとなる「大津絵」の収集も始まっている。

一般に郷土資料館では常設展示が主となるが、町田市郷土資料館では開館当初から企画展示主体の展示活動を展開してきた。町田市立博物館もそれを踏襲し、企画展示は考古・民俗を主体としたものに、工芸や絵画の分野が加わっていくこととなる。

1984（昭和57）年、千沢館長の引退後5年間は社会教育課長が館長事務取扱の時期が続いたが、企画展示は考古・民俗と工芸・美術がほぼ半々で開催されている。そして1984（昭和59）年には町田市立博物館の重要なコレクションとなるガラス工芸の収集が始まった。

○町田市立博物館の充実と明日へ

1987（昭和62）年、文化庁の文化財鑑査官であった田邊三郎助（1923～）が第4代館長として就任する。田邊館長は東京国立文化財研究所、国立歴史民俗博物館、東京国立博物館、文化庁において要職を歴任、彫刻史において視野の広い研究で知られる学究である。

この年、収集では田河水泡氏より寄贈を受けて関連資料の収集が開始された。そして1000点を越える幕末明治期の陶磁器の受贈があってガラス工芸とともに町田市立博物館の重要なコレクションである陶磁器の収集が始まっている。

2019（平成31）年3月の田邊館長退任までの31年間で、193件の展覧会が開催された。考古、民俗、工芸、美術とその内容は広範にわたっているが、ガラス工芸、陶磁器の収集が進んだことによる収蔵品の充実とともに工芸をテーマとする展覧会が半数を越えるものとなっている。一般に公立博物館では、収蔵品や展覧会の内容で個性を持つことが難しい。そんな中で町田市立博物館は陶磁器・ガラスという工芸で独特のコレクションを形成し、多くの注目を集める展覧会を作り続けてきた。

○新たな始まり

開館30年を経過した頃より、施設の老朽化が進み、博物館活動に求められる新たな動きへの対応も難しさを増し、館の改修・新設が望まれるようになってきた。2008（平成20）年、博物館の所管が教育委員会から文化スポーツ振興部へと移管されると、2010（平成22）年には内外の識者による委員会による博物館機能の新たな在り方の検討が始まり、翌年度には市立博物館の再整備に向けた基本構想がまとめられた。2012・13年度（平成24・25）には（仮称）町田市立国際工芸美術館整備基本計画の策定が行われ、2014（平成26）年6月に概要が公示されている。この計画は2016（平成28）年2月に基本設計が完了したが、新たに町田市の文化ゾーン整備計画という大きな計画の中に新美術館を位置づけるという方針のもとに2018（平成30）年以降、新たな計画の策定が進められている。

2019（平成31）年、第5代館長として伊藤嘉章が着任し、「町田市立博物館最終展－工芸美術の名品－」で町田市立博物館で273回目にして最後の展覧会が開催された。

館では新工芸美術館への移管に向けて様々な準備が進められている。新美術館に移管となる陶磁器・ガラス資料については詳細な悉皆調査を行っている。絵画資料については国際版画美術館に、考古資料及び民俗資料については教育委員会への移管に向けて、整理が進められている。中でも民俗資料については、今後の保存とさらなる有効な活用に向けての新たな指針が策定された。

（仮称）町田市立国際工芸美術館は、陶磁器・ガラス工芸を主体とした工芸コレクションを擁する美術館となる。「使う」ということが大きな意味を持つ工芸を主体とする美術館として、どのようにその魅力を伝えていくのかが、大きな課題となっている。そのために、これまで以上に積極的に館の外に出て、「触れ合う」や「作る」といった体験としての活動を行っている。そうした中から、工芸のある生活の豊かさを町田市民に伝えていくことのできる美術館を目指している。

（2021年3月1日）

町田市立博物館 館長 伊藤嘉章